山形美術館　山形大学附属博物館　東北芸術工科大学

山形美術館の傑作たち Part 2

2007年度　公開講座
講 義 要 項

山形大学附属博物館
TEL 023-628-4930

ご　挨　拶

日本内外の名作を数多く所蔵する山形美術館を会場に、現物があるまさにその場所での公開講座、そして作品を目の前にしての軽妙なギャラリートーク。とても刺激的な企画で好評を博した昨年度の公開講座「山形美術館の傑作たち」の第２弾です。今年度はますます多彩な講師陣によりバージョンアップしての再登場となります。

この講座は、「傑作たち」の生まれた背景、名作を生み出した画家たちの人となり、そしてその作品に込められたメッセージなど、図録や解説書には載っていないようなワクワクする内容となることでしょう。皆様の好奇心・探究心を大いに満たしていただきたいと願っております。

講　義　日　時

回・月日			講　　義　　題	時間	講　　師
第１回	１１月１７日(土)	13:30 ~ 15:10	「故郷の最上川を描く」（小松　均）	100分	山形美術館長 加　藤　千　明
		休　憩　時　間			
		15:20 ~ 17:00	「ミロの風景画」（ジョアン・ミロ）	100分	東北芸術工科大学 芸術学部　准教授 安　發　和　彰
第２回	１１月２４日(土)	13:30 ~ 15:10	「蕪村の内なる芭蕉」（与謝蕪村）	100分	山形大学大学院 理工学研究科　教授 山　本　陽　史
		休　憩　時　間			
		15:20 ~ 17:00	「冬のゴッホ」（フィンセント・ファン・ゴッホ）	100分	山形大学 人文学部　教　授 元　木　幸　一
第３回	１２月１日(土)	13:30 ~ 15:10	「マネ≪イザベル・ルモニエの肖像≫について」（エドゥアール・マネ）	100分	山形大学 人文学部　准教授 阿　部　成　樹
		休　憩　時　間			
		15:20 ~ 17:00	「近代絵画、萬(よろず)、引き受けます―萬鉄五郎≪かなきり声の風景≫について」（萬鉄五郎）	100分	山形大学 地域教育文化学部准教授 小　林　俊　介

※ 講師の都合により講義順が入れ替わる場合があります。

※ 初日に開講式、最終日に閉構式を予定しております。

第１日目　１１月１７日（土）

「故郷の最上川を描く」　小松　均

山形美術館長　加藤　千明

本県の大石田に生まれた小松均は、昭和の日本画界において独自の水墨画を創出した画家として高く評価されている。なかでも還暦を過ぎてから、故郷への熱い思いをぶつけるように取り組んだ最上川の連作によって芸術選奨文部大臣賞を受賞、さらには文化功労者に選ばれた。水墨の画家小松均は、最上川の画家として後世にまで名を残していくにちがいない。日本画に生涯を捧げる一方、小松均は京都大原に土地を求め、田を耕し、鶏を飼って自給自足の暮らしを理想とする生き方を続け、その風貌とともに大原の画仙人と呼ばれてもいる。本講では、現代の画壇において特異な存在であった小松均の生涯を辿りながら、母なる川である最上川を描くまでの心のありようを、大きく次の三つ時期に分けて探ってみたい。

（１）１歳のときに僧侶だった父を亡くし、母の実家に戻って農家の子として過ごした小松均の幼少期における人格形成と、彼が一生抱き続けた故郷と土への強い愛着の内に潜む複雑な思いに光をあてる。

（２）彫刻家を夢見て家出同然に上京し、新聞配達をしながら川端画学校で学び、京都の国画創作協会の運動の渦に飛び込んでいった修業時代のドラマを紹介し、京都で画家として認められ始めた小松均が、何故水墨画を目指すようになったのか、そして独自の水墨画の画法を確立していく過程を明らかにする。

（３）水墨画による大作を描いて画壇の注目を浴びた小松均が、何故６７歳にして本格的に最上川に取り組み始めたのか、また命がけの制作を続けた最上川連作を中断した無念の思いと、晩年に辿り着いた精神の境地とは如何なるものだったのかを探る。

加藤　千明（かとう　ちあき）

1974 年、東北大学文学部美学西洋美術史学科卒業。同年、共同通信社に入社、川崎、山形、横浜の各支局、本社報道部で記者として勤務。1985 年、同社を退社し、財団法人山形美術館に勤務、同年 10 月、学芸課長となる。2003 年 8 月、館長となり現在。

地方の美術館としての役割を果たすため、絵画、彫刻、工芸、書、写真など幅広いジャンルの展覧会を企画・実施しており、特別の専門分野というものはないが、地元山形出身の美術家に関する調査を少しでも進めたいと願っている。

第１日目　１１月１７日（土）

「ミロの風景画～詩魂の画家の誕生」 ジョアン・ミロ

東北芸術工科大学　准教授　安發　和彰

スペイン、カタルーニャ地方バルセロナ生まれの画家ジョアン・ミロ（1893-1983 年）は、明るく鮮やかな色彩と形体を極限まで切り詰めた記号的モティーフを駆使した、生命感溢れる抽象表現によって、20 世紀美術の巨匠として国際的評価を得てきています。ミロの芸術は、絵画や版画のみならず、彫刻、陶芸など多岐にわたり、またきわめて多作でしたが、どの作品も、自由な精神と解放された感覚が、豊かな「ミロの詩的宇宙」を生みだしていて、私たちを魅了してやみません。

私たちの山形美術館には、ミロの初期の風景画≪シウラナの村（ポリデス山）≫（油彩・カンヴァス　51×62cm　1917 年＝ミロ 24 才）が展覧されています。1918 年 2 月、バルセロナにおける初の個展（絵画、素描 64 点を出品）で公にされた１点であり、このときの他の出品作と同様、カタルーニャの田舎の素朴な自然を描いたみずみずしい作品です。ここには、随所に記号的表現への兆しがみられ、後年の抽象への契機を確認できますが、岩肌をむき出した聖山ポリデスを背に、山間の小村シウラナの風景を、ミロは活気に満ちた色彩を用いて、深い共感をもって表しました。自然のなかに脈打つ生成のエネルギーを描き出すこと、それがこの作品の目的であり、私たちは、そこに、精神的で自由な絵画をめざす詩魂の画家ミロの創造の原点がみとめることができるのです。

この講座では、画家としての天分をはっきりと自覚したミロの青年時代をめぐって、①残された当時の手紙によって、若きミロの芸術的志向を読み取りながら、②ミロをとりまく芸術的環境～パリからもたらされる印象派以来のフォーヴィスムやキュビスム等の新芸術からの影響を確認しつつ、③≪シウラナの村（ポリデス山）≫に、ミロの詩的抽象にいたる端緒をみきわめたいと思います。

安發　和彰（あわ　かずあき）
1952 年生まれ。早稲田大学大学院博士課程を経て、スペイン政府給費留学生としてマドリード大学に留学。現在、東北芸術工科大学准教授。専攻はスペイン美術史。著書に『天国へのまなざし』『天使が描いた』（以上講談社、共著）、訳書にクリスト他『中世　美の様式』（連合出版、共訳）、ビバンコス他『ベアトゥス黙示録註解・ファクンドゥス写本』（岩波書店、共訳）、パラウ・イ・ファブレ『ピカソ　キュビスム 1907-1917』（平凡社、共訳）など。

第２日目　１１月２４日（土）

「蕪村の内なる芭蕉」　与謝　蕪村

山形大学大学院理工学研究科　教授　山本　陽史

・蕪村屏風の成立と流転

山形美術館蔵長谷川コレクションの与謝蕪村筆「奥の細道屏風」は個人蔵の「野ざらし紀行屏風」と一対をなすもので、もと両方を蕪村に制作を依頼したと見られる灘の酒造家で俳人であった松岡士川家で所蔵していたが、その後松岡家の家運の衰退によって別れ別れになる運命をたどった。その成立と流転の経緯を可能な範囲で解説する。

・蕪村の芭蕉観

江戸時代を代表する画家でもあった蕪村は『おくのほそ道』を好んで画題として取り上げ、本文と絵を組み合わせて書いたものはこの屏風以外に巻物などの形で数種類残されている。蕪村自身が芭蕉を尊崇していたことでの表れであり、また一般に蕪村の時代に芭蕉が神格化されていった趨勢を反映したものでもある。蕪村の活躍した 18 世紀後半は俳諧の歴史ではいわゆる「中興期」と呼ばれる時期をなし、その句風は「天明調」とも呼ばれる。その時代の空気と蕪村の芭蕉観を考える。

・屏風の見所

奥の細道屏風は限られた屏風というスペースの中に『おくのほそ道』の全文といくつかの場面の画が巧みに配置されている。その見所について解説する。

山本　陽史（やまもと　はるふみ）
本年度から再び山形大学に勤務することになりました。
江戸時代風に言えば「帰り新参」。
米沢の工学部勤務ですが、専門は江戸時代の文学と日本文化論です。最近は江戸時代の黄表紙（現代の漫画のような絵入り小説）の注釈と、「日本人と世間」をテーマに研究をしています。山形美術館の蕪村屏風については、大学院博士課程進学後初めて書いた論文で取り上げたもので、懐かしく思っています。研究生活の原点に返った話をしたいと思います（最近物忘れが激しいので不安ですが）。

第２日目　１１月２４日（土）

「冬のゴッホ」フィンセント・ファン・ゴッホ

山形大学人文学部　教授　元木　幸一

フィンセント・ファン・ゴッホ《雪原で薪を集める人びと》（1884 年、67×126 cm）を題にして話をします。

10 年ほど前に山形大学の学生数百人に「あなたの知っている画家の名前を５人挙げなさい」というアンケートをしたことがあります---他に作家、音楽家なども。図抜けて多かったのはゴッホとピカソとレオナルド・ダ・ヴィンチでした。つまりルネサンスなど古い画家を代表するのがレオナルド、近代美術を代表するのがゴッホ、現代美術を代表するのがピカソというのが、山形大学学生の標準的な見方でした。対象が東北芸工大のような芸術を専攻している学生ではありませんから、市民一般の見方に限りなく近いのではないでしょうか。

この状況は今でもあまり変わらないでしょう。『ダ・ヴィンチ・コード』の影響で、レオナルドがやや優勢かもしれませんし、最近ではフェルメールが３人に追いつきそうではありますが。

ピカソはすでにありましたし、レオナルドが入る訳はありませんから、ゴッホが山形美術館にやってきた時にはびっくりしました。立派なセザンヌが姿を現した後に、今度はゴッホなのですから。しかもこのゴッホ、珍しいゴッホです。あまりゴッホらしくない初期作品です。

山形美術館はルノワールも《森の小径》など良質の初期作品を展示しています。そして今度はゴッホの初期作品です。あの麦畑や星月夜のような神経質な、あるいは偏執狂的なタッチではありません。不器用なタッチで描かれた、不器用な人物描写です。太陽もぎこちない形です。

しかし、それでもゴッホです。いやそれだからこそゴッホなのです。

このゴッホを西洋美術史の文脈において考えてみましょう。「天才」ゴッホでも実は、長い西洋美術史の中に位置づけられるように思いますので。

元木　幸一（もとき　こういち）
1950 年仙台生まれ。相変わらずサッカーファン。しかし最近どこを応援して良いか分からなくなっている。あえていえば、オシム・ファンかな。美術史の専門は 15～16 世紀のネーデルラントやドイツの美術。最近はリーメンシュナイダーというドイツの彫刻家を勉強しようと思っている。この頃の著訳書として『ファン・エイク西洋絵画の巨匠 12』（小学館）、グレシンジャー『女を描く』（三元社）などがある。

第３日目　１２月　１日（土）

「マネ《イザベル・ルモニエの肖像について》」エドゥアール・マネ

山形大学人文学部　准教授　阿部　成樹

19 世紀半ばから後半にかけて活躍したフランスの画家エドゥアール・マネ(1832-83)は、いろいろな面でヨーロッパ絵画の革命児でした。まず彼は、絵に描くに値する主題とはこういうものだ、という暗黙の了解に逆らって、当時の美術ファンの神経を逆なでしました。《草上の昼食》や《オランピア》といった作品がその名高い実例です。しかも彼は、この種の作品に過去の巨匠から借用したモチーフ（絵の中に描き込まれた要素）を紛れ込ませて、いっそう手の混んだ「くすぐり」に仕上げているように思われます。この種の諧謔あるいは冗談は、19 世紀末から次の世紀にかけて、進歩的な芸術家たち（文学者のコクトーや、音楽家のサティなど）の重要な表現手段になっていきます。また表現の面でも、マネは斬新な構図や「奥行き」を否定した空間で、それまでの絵画表現を大きく変えてしまいます。マネのこのような活躍に続いたのが、印象派の面々であることはよく知られています。

そうしたマネの新しさの中に、筆遣いの大胆さがあげられます。多くの作品で彼は勢いよく、伸びやかに筆を運び、その動きはまるで指揮者のタクトを思わせるほどです。この大胆な筆遣いはマネと印象派を結びつける重要な接点ですが、印象派の画家たちが主に風景を相手に筆をふるったのに対して、マネはむしろ人物を描く際にその奔放な運筆を爆発させています。そしてこの筆遣いのすごさこそ、画集の図版ではほとんど感じ取ることができない、マネの作品の真髄といえるでしょう。それをいつでも楽しめる山形市民は、恵まれていると言えます。

19 世紀のパリ市民には評判の悪かったマネの筆遣いは、われわれ日本人には直感的に分かりやすいものです。それは、われわれが多かれ少なかれ書画の伝統に親しんでいるからです。今回はマネの筆遣いに注目しながら、《イザベル・ルモニエの肖像》を味わい尽くしたいと思います。

阿部　成樹（あべ　しげき）
1962 年京都生まれ。東北大学大学院修了。パリ大学美術史学博士。主として 18 世紀から 19 世紀にかけてのフランス美術、特に新古典主義といわれる潮流に分類されるジャック＝ルイ・ダヴィッドや、ドミニク・アングルを研究しています。訳書として、フォシヨン『かたちの生命』（ちくま学芸文庫）、シャステル『ルネサンスの神話』（平凡社）、ラコスト『芸術哲学入門』（白水社）などがあります。

第３日目　１２月　１日（土）

「近代絵画、萬（よろず）、引き受けます
－萬鉄五郎《かなきり声の風景》について－」

山形大学地域教育文化学部　准教授　小林　俊介

野獣派、立体派、未来派、抽象絵画、何でもござれ。大正期の日本という西欧文化の「辺境」にありながら、同時代のあらゆる先端的な，非再現的な絵画表現をどん欲に摂取し、しかも下手なもの真似に終わらず、ちゃんと自己の表現として消化（昇華）している。「近代絵画、萬（よろず）、引き受けます」。萬鉄五郎（よろず　てつごろう、1885-1927）はまさに千両役者、近代日本絵画史における萬屋錦之介なのである（若干意味不明か）。

閑話休題。萬作品は何が描かれているのかわかりづらいかもしれない。時代は大正。同時代の画家と同様、萬もまた「内的なもの」、「生命」の表現をいう。人間の内部－「精神」－を優先すれば、外的な「自然」の視覚的再現は放棄しなければならないというわけだ。しかし「内面」とはいったい何だろう？平成の若者はいうにおよばず、昭和後期生まれの中年世代－私のことだ－にとっても、もはや内面や精神といわれてもピンとこない。自分の内側などからっぽである。養老孟司風にいえば、そこには「身体」があるだけだ。しかし身体には「生命」の鼓動があり、リズムがある。萬が描いたのは、身体的なリズム感－換言すれば「時間」的なものだったのではないか。

萬は 20 世紀初頭の西洋絵画の先端的傾向の核心にある「反視覚中心主義」を看取していた。目だけに頼らないこと。五官全体を稼働して対象を把握し描くこと。そこには音楽、演劇、舞踊など身体的芸術と縁の深い動的な、時間的な表現も加わってくる。《かなきり声の風景》（1918 年）とは、まことに萬らしい作品なのである。

小林　俊介（こばやし　しゅんすけ）
1966 年生まれ。画家・美術史家。近代日本美術史専攻。現在、山形大学地域教育文化学部准教授。主な著書に『難波田龍起－抽象の生成』（美術出版社、1998 年）。『クラシック・モダン　1930 年代日本の芸術』（共著、せりか書房、2004 年）。主な展覧会に「VOCA 展 2004」（上野の森美術館）、「絵画の行方－現代美術の美しさって何」（府中市美術館、 2005－2006 年）。目下の趣味は薪割りと園芸。

公開講座受講簿

第１回	第２回	第３回
11 月 17 日（土）	11 月 24 日（土）	12 月 1 日（土）

受　講　番　号	

氏　名	